

「農業の競争力を強化する産学官連携の取組み —オランダと日本の経験から—」

〔農林中央金庫、農林中金総合研究所、ラボバンク、ワーヘニン ゲン大学研究センター共催セミナー〕

2016.6.20

農林中金総合研究所

主事研究員 一瀬 裕一郎

1 セミナー概要

農林中央金庫とオランダのラボバンクは、2015年に食品・農業関連金融分野を中心とした戦略的提携に関する覚書を締結しました。この提携に基づき、当社もラボバンクと調査・研究分野での交流を進めており、その一環として、2016年6月13日に農林中央金庫(以下「金庫」)、農林中金総合研究所、ラボバンク、およびワーヘニンゲン大学研究センター(以下「WUR」)の4者が共催して、「農業の競争力を強化する産学官連携の取組み—オランダと日本の経験から—」と題するセミナーを、オランダ農業に関心のある行政関係者、企業関係者、研究者、系統関係者等、約100名の参加者を集めて、都内で開催しました。

開会にあたって、日本側からは当社代表取締役専務の柳田茂が、金庫とラボバンクの提携を紹介するとともに、セミナーの主旨や目的を説明しました。世界第2位の農産物輸出額を誇るオランダ農業の強い競争力の背景にある産学官連携の仕組み(いわゆる「ゴールデントライアングル」)はどのようなもので、いかなる点が日本にとって参考となるのか、セミナーを通じて理解を深めたいと挨拶しました。続いて、オランダ側からはWURのDr. Arjo Rothuisが、食料・農業分野における世界有数の教育研究機関であるWURが農業のイノベーションで果たしている役割について、中国での取組み等を通じて紹介しました。

主催者2名の挨拶に続いて、セミナーに入りました。セミナーは二部構成で、前半がテーマの解題と3本の基調講演、後半がパネルディスカッションでした。

セミナーのファシリテーターは、オランダ農業に深い知見をお持ちの日本大学・宮部和幸教授に務めていただきました。セミナー前半冒頭に、宮部教授によるテーマの解題がなされました。イノベーションによって農業の競争力が強まること、農業におけるイノベーションは農業生産技術のみからヘルスケアや情報通信技術(ICT)等も含んだ領域へと拡大していること、イノベーションは予算や人材を投入して意識的に創出するものであること、オランダのゴールデントライアングルはイノベーション創出の世界有数の成功事例であること、等が紹介されました。その上で、ゴールデントライアングルをうまく機能させる鍵は何か、成功している側面ばかりが目されるゴールデントライアングルには果たして影はないのか等の点について議論してみたいとの論点提起がなされました。

2 基調講演

解題に続いて、WURのDr. Jos Verstegen、ラボバンクのMr. Dirk-Jan Kennes、農林水産省農林水産技術会議事務局の菱沼義久・研究総務官の3名から、基調講演がなされました。

Dr. Jos Verstegen は、オランダ政府の有望な産業分野を重点的に振興するトップセクター政策の下で、協同組合、大学、研究機関、民間企業、政府が強固なネットワークを形成し、協力体制(=ゴールデントライアングル)を築いたことがオランダ農業の成功の背景にあるとする一方で、ゴールデントライアングル関係者間の紐帯が堅牢過ぎて、自由な起業家精神の発揮を妨げている部分もあるという課題も指摘しました。

Mr. Dirk-Jan Kennes は、ゴールデントライアングルがかつての農業研究機関、農業教育機関、農業普及機関の連携から、産業、行政、大学の連携へと進化することを指摘するとともに、ラボバンクが金融機能、情報機能、ネットワーク機能を発揮し、ゴールデントライアングルが円滑に動くように貢献していることを紹介しました。

菱沼研究総務官は、農林水産業および食品産業の成長産業化のために、農林水産省が主導して立ち上げた「知」の集積と活用のもとと呼ばれる産学官が連携したオープンイノベーションの仕組みについて説明するとともに、農業の現場においてロボットやドローン、AI(人工知能)の活用につなげていく具体的なプロジェクトが始動していることを紹介しました。

3 パネルディスカッション



後半のパネルディスカッションではファシリテーターと3名の基調講演者に加え、JA 氷見市でハトムギを使った六次産業化を進めたのち、当 JA と金沢大学の合弁企業である株式会社アグリリンクテクノロジーで総合企画部長を務めている田上政輝氏がパネリストとして登壇しました。

パネルディスカッションの冒頭で田上部長が金沢大学、JA 氷見市、行政が連携して、ハトムギを使用した飲料や健康食品の開発と販

売を行ってきたことを紹介しました。続いて、相手国の農業におけるイノベーションの取組みについて、各パネリストが意見を述べました。

日本側からは、農業において産学官でイノベーションを創出していこうという方向性はオランダと共通しているという感想が出されました。オランダ側からは、日本では農業に能力のある若い人材を引き付けられる魅力的な農業教育が、日本農業においてイノベーションを持続的に創出する際に重要な鍵となるだろうという所感が出されました。また、フリースランドカンピーナといった大規模な専門農協がイノベーションの創出に深くかかわっているという意見がオランダ側から出される一方で、日本の農協はイノベーションに関してリスクテイクが十分でない面もあったのではないかと意見が日本側から出されました。

フロアからはオランダ農業の将来像をどのように描いているのかというオランダ側への質問があり、消費者が強い関心を抱いている食品安全や動物福祉に配慮した農業が広がっていき、そのような

農業に必要となる分野（例えば食品鮮度保持技術、家畜飼養技術等）でイノベーションを創出する方向に進んでいくのではないかという見通しが披露されました。

パネルディスカッションの最後に、宮部教授は、オランダのゴールドントライアングルで日本が参考にできる点として、多様な人々が参加するオープンイノベーションの仕組みを構築する重要性、コーディネート機能を発揮する人が不可欠であること、古くから治水事業を通じて協同の文化が息づくオランダはオープンイノベーションに親和性があること、イノベーションはビジネスオリエンテッドであり商売に結び付けることが強く意識されていること等が、指摘されました。それとともに、顔見知りばかりのゴールドントライアングルの影、すなわちゴールドントライアングルの排他性、硬直性の萌芽についても言及がありました。農業機械学と分子生物学のように専門領域が離れている人々、オ



ランダと日本のように物理的な距離が離れている人々とも幅広く柔軟に交流を持つことが、スピード感のあるイノベーションには重要であるということ、
「恋愛は遠距離の方が上手くいくことも多い」という喩えを使って指摘

しました。

セミナーの最後に挨拶に立った金庫の奥和登・専務理事は、今回のセミナーを端緒の1つとして金庫グループとラボバンクの連携をさらに深化させていくこと、金庫は食農分野における存在感を一層高めるために食農に特化した部署を立ち上げ取組みを強化していくこと等に触れ、半日に及んだセミナーを締めました。なお、セミナー終了後には金庫主催のレセプションも開催され、関係者が活発に情報交換や交流を図っていました。

4 ワークショップ

翌6月14日午前には、当社会議室で、オランダと日本の農業に関するより個別具体的な論点について自由に意見交換するワークショップが開かれまし



た。オランダからはセミナーに登壇した WUR の 2 名が参加し、日本からは金庫および当研究所役員だけでなく、京都大学、東京農業大学、みずほ総合研究所の研究者にも参加をいただきました。

公的セクターの補助の有無が農業の競争力に及ぼす影響、農業経営の規模拡大において農地の賃貸借と売買ではどちらが主流なのか、日本でオランダ型のノウハウの取り入れた施設園芸の現状と課題、オランダの会計事務所と日本の農協が会計面で農業経営に提供する役務、オランダと日本における農産物流通の拠点である卸売市場の仕組みの相違、等、多岐にわたるテーマが議論に上り、予定していた 2 時間を超過して活発な意見交換が行われました。

(いちのせ ゆういちろう)